

福井県埋蔵文化財調査報告 第二五一集

上蔵垣内遺跡

二〇一四

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

福井県埋蔵文化財調査報告 第 151 集

# 上蔵垣内遺跡

— 国営九頭竜川下流土地改良事業に伴う調査 —

2014

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

福井県埋蔵文化財調査報告 第151集

# 上蔵垣内遺跡

— 国営九頭竜川下流土地改良事業に伴う調査 —

2014

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター



## 序 文

このたび、国営九頭竜川下流土地改良事業に伴って坂井市坂井町五本地係において、平成21年度に発掘を実施しました上蔵垣内遺跡の調査成果がまとまり、報告書を刊行することとなりました。

上蔵垣内遺跡は、坂井市のほぼ中央、また嶺北地方北部に広がる坂井平野のほぼ中央に立地しています。坂井平野には多くの遺跡が分布していますが、近年では発掘調査を行う機会が増加しており、しだいにこの地域の様相が明らかになってきました。

今回の調査では、溝を主体とする遺構を確認したものの、遺跡全体の内容を把握するには至りませんでした。しかしながら、これらの資料が今後、坂井平野の歴史を知る手がかりとなり、広く活用されること、本書が、埋蔵文化財に対する理解をより一層深めていただくきっかけとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの皆様から多大なご支援とご協力を賜りましたことに、深く感謝申し上げます。

平成26年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター  
所 長 畠 中 清 隆

## 例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが、国営九頭竜川下流土地改良事業に伴い、平成21年度に実施した上蔵垣内遺跡（福井県坂井市坂井町五本所在）の発掘調査報告書である。
- 2 上蔵垣内遺跡の調査は、北陸農政局九頭竜川下流農業水利事業所の依頼を受けて、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、野路昌嗣、中村嘉之が担当した。
- 3 発掘調査は、平成21年4月8日から平成21年8月31日まで実施した。出土遺物の整理作業は平成22年4月1日から平成26年3月18日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 4 本書の編集は野路があたり、山本孝一が分担して執筆した。なお、執筆の分担は以下の通りである。  
野路 第1章～第4章第1節、第2節3～6、第5章 山本 第4章第2節1・2
- 5 本遺跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬のある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 6 遺構・遺物の図面・図版作成は中村、山本、京藤洋、野路が、遺構の写真撮影は野路が、遺物の写真撮影は杉田曜が行なった。
- 7 本書に掲載した遺構全体図は、株式会社平和ITCに委託し作成したものを一部改変して使用した。上空からの写真は、航空測量時に同社が撮影したものである。また、漆器の保存処理作業は、株式会社吉田生物研究所に委託した。
- 8 本書における水平レベルの表示は海拔高（m）を示し、方位は座標北を用いた。また、X・Y座標値は世界測地系第VI系に基づく。
- 9 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 10 発掘調査には、地元の方々の参加・ご協力を得た。また、遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理作業員があたった。

## 凡 例

- 1 本書で用いた遺構記号は、以下のとおりである。  
土坑：SK、溝：SD、井戸：SE、ピット：SP
- 2 第4表の縄文・弥生土器観察表の胎土は次の5種類に分類している。  
①直径1mm以下の砂粒を多量に含む ②直径1mm以下の砂粒をやや多く含む ③直径2mm以下の砂粒を多量に含む ④直径2mm以下の砂粒をやや多く含む ⑤直径3mm以下の砂粒を多量に含む
- 3 第8表の古代の土器観察表および第9表の中世の土器観察表の胎土は次の4種類に分類している。  
①微砂粒（径1mm以下）を少量含む ②微砂粒（径1mm以下）を多量含む ③砂粒（径1～2mm）を含む ④やや粗い砂粒（径2mm以上）を含む

## 目 次

第1章 調査に至る経緯と経過 .....	1
第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 調査の経過 .....	1
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境 .....	3
第1節 地理的環境 .....	3
第2節 歴史的環境 .....	4
第3章 遺跡の概要 .....	5
第1節 層序 .....	5
第2節 遺構の分布状況 .....	6
第3節 遺物の出土状況 .....	6
第4章 遺構と遺物 .....	11
第1節 遺構 .....	11
第2節 遺物 .....	18
第5章 まとめ .....	25

## 写真図版目次

図版第1 遺跡	(1) 遺跡近景	図版第3 遺物
	(2) 調査区西側	図版第4 遺物
図版第2 遺構	(1) SE01 (4) SE03検出状況	
	(2) SE02 (5) SE04	
	(3) SE03 (6) SE04漆皿出土状況	

## 挿 図 目 次

第1図	事業計画と調査位置	2	第10図	土層図(2)	15
第2図	調査区位置図	2	第11図	井戸遺構図	16
第3図	遺跡周辺の地形図	3	第12図	遺物出土状況図	17
第4図	周辺の主な遺跡	4	第13図	縄文土器・弥生土器(1)実測図	19
第5図	遺構配置図	7・8	第14図	弥生土器(2)実測図	20
第6図	東西ベルト土層図(1)	9	第15図	土製品実測図	21
第7図	東西ベルト土層図(2)	10	第16図	石器実測図	21
第8図	調査区西側遺構配置図	12	第17図	古代の遺物実測図	22
第9図	土層図(1)	14	第18図	中世の遺物実測図	22

## 表 目 次

第1表	土坑一覧表	11	第7表	玉作り関係遺物観察表	24
第2表	溝一覧表	13	第8表	古代の土器観察表	24
第3表	井戸一覧表	16	第9表	中世の土器観察表	24
第4表	縄文土器・弥生土器観察表	23	第10表	中世の石製品観察表	24
第5表	石器観察表	23	第11表	中世の木製品観察表	24
第6表	土製品観察表	24			

## 第1章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

福井平野北部に広がる坂井平野は県内でも有数の穀倉地帯であり、永平寺町鳴鹿大堰より取水された水は十郷用水をはじめとする水路網により、広く坂井平野に供給されている。しかし、昭和20～47年に整備された農業用水路は老朽化し、水田の宅地化など周辺環境が大きく変化したこともあり、農業用水路再構築の必要がでてきた。そのため、農林水産省北陸農政局九頭川下流農業水利事業所（以下、農政局と略）では、平成11年度より、既設の水路をバイブライン化する国営九頭川下流農業水利事業に着手することとなった。この事業は、老朽化した施設を改修することにより、用水の安定供給による生産性の向上と農業経営の安定、および生活排水・ゴミ混入の防止による水路の維持管理費軽減、塩害の防止、水路への転落事故防止などを目的とするものである。この事業に伴い福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、県埋文センターと略）では、バイブライン埋設計画路線内に存在する遺跡の試掘調査を平成11年度から行い、平成16～18年度までに5遺跡の発掘調査を行った（第1図）<sup>①</sup>。

今回の調査地である上蔵垣内遺跡は、福井県坂井市坂井町<sup>三ノ宮</sup>五本に位置する。東西に走る県道をはさみ、南には五本の集落が、北には水田が広がる。この地に「十郷2号用水路その6建設工事」として、東からのバイブライン本線の水流を、新設および既存の用水路に分水するための施設が建設されるにあたり、農政局側より埋蔵文化財の試掘調査依頼があった。そのため県埋文センターは平成20年10月1～3日に、計画路線の中で該当する長畑・定旨遺跡と上蔵垣内遺跡の試掘調査を実施した。試掘調査の結果、長畑・定旨遺跡においては遺構・遺物は確認されなかったが、上蔵垣内遺跡において、遺構では溝や自然河川と考えられる落ち込みを、遺物では縄文時代晩期、弥生時代中期、古代、中世の土器を確認し、上蔵垣内遺跡における事業対象面積4,100㎡のうち、3,100㎡について本格調査が必要である旨を回答した。これを受けて農政局側は計画変更を行い、数度の協議を経て最終的に埋設構造物の形状に添った1,200㎡を県埋文センターが調査することとなった（第2図）。

### 第2節 調査の経過

工事計画範囲と現場事務所予定地は、調査前は水田であったため、開始にあたり、該当する水田全面の耕作土を除去する必要がある。平成21年3月に該当範囲の水田において20～30cmの深度で重機による耕作土の掘削を行い、現場事務所予定地を造成し、調査範囲以外で耕作土直下が遺構確認面となる範囲には約30cmの厚さで砂質土の保護層を設けた。なお、試掘調査により調査区東側は谷状に落ち込み、遺物の出土量もほとんどないことが判明していたため、調査期間短縮のため、この区域は調査開始後さらに約40～50cmの深度で重機による掘削を行った。

調査にあたり、調査区に世界測地系に従い10m×10mのグリッドを設け、東西にA～F列を、南北に1～7列を配し、接点を杭を設定し、さらに各グリッドを4分割し、時計回りに1～4に区分した。

作業の開始にあたり、平成21年4月1～3日に現場事務所設置・器材搬入を行った。作業員は同8日に集合し、調査区の周囲に沿って排水溝を掘削する作業から開始した。杭打ちは同20日に行った。4月中は主に東西トレンチを設定し、西側の表土、包含層の掘削の後、遺構面の確認と精査を行った。5月に入り、SD01に東西にトレンチを入れ断面を確認した後、掘削し、中旬に遺構写真撮影と図化を

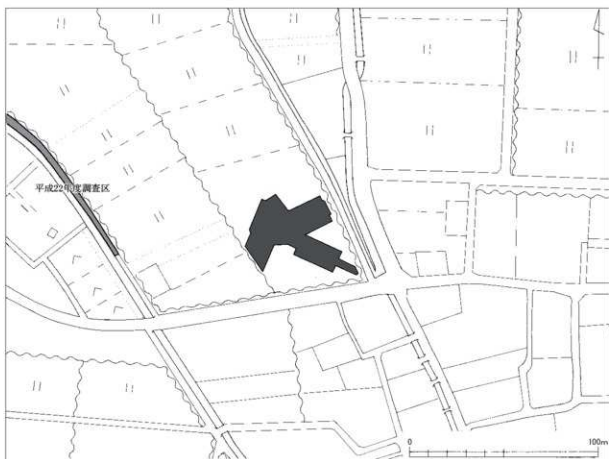




第1図 事業計画と調査位置 (縮尺1/50,000)

行った。その後は黒色土上面の検出を行い、この面で確認できる遺構の精査を行うと同時に、調査区東側の包含層は重機による掘削を行った。SD02は下旬までに掘削が終了し、写真撮影、平板図作成を行った。6月から7月は、SD04・05をはじめ、SD03・06の掘削、その他確認していった溝の掘削を行い、井戸であるSE04の完掘・写真撮影を行った。調査区西側は赤橙色粘質土層を掘削するも、非常に粘性が強く、作業は難航した。8月上旬には各溝、井戸の掘削はほぼ終了し、同11日に空中写真測量を、翌12日に全景および遺構写真撮影を行った。その後、黄色土面まで掘削を行い、確認したピット等の図面の作成、トレンチ出土遺物の図化を行い、同26～31日に器材撤出、現場事務所撤去を行い、現地作業を終了した。

注 坂井平野におけるパイプライン埋設事業は、北陸農政局と福井県の県営事業の連携である。後者に伴う発掘調査には、平成22年度県営かんがい排水事業に伴う上蔵垣内遺跡がある(第2図)。



第2図 調査区位置図 (縮尺1/2,000)

## 第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

上蔵垣内遺跡は福井県北部に広がる福井平野に位置する。福井平野は北を加越台地、東を加越山地、南西を丹生山地に囲まれ、南端は両山地間に位置する城山、経ヶ岳などの独立丘陵および文殊山により狭められ、鯖江市、越前市が位置する南越盆地へ通じる。北西は三里浜と呼ばれる砂丘を介し日本海を望む。加越山地と丹生山地は、もとは一連の山地であったと考えられており、両山地間が沈降した後、九頭竜川をはじめ諸河川の堆積作用によって形成されたのが福井平野である。九頭竜川は永平寺町鳴鹿を扇頂とする九頭竜扇状地を形成する。また、加越山地西麓から流れ出る諸河川は平野東部に小扇状地を形成している。九頭竜扇状地は緩傾斜で、約10mの等高線付近から西・北方向には低平な氾濫源と三角州が広がっている。縄文海進時は浅海だったと考えられ、浅海は三里浜砂丘の成長により、次第に海から隔てられ潟湖となり、その後、海退と河川の沖積作用により平野が形成されていったようである。九頭竜川以北を指して坂井平野とも呼ぶが、沖積平野としての連続性は地形・地質とも変わりはない。

坂井平野には九頭竜川をはじめ、竹田川、兵庫川などの河川および氾濫した旧河道が形成した自然堤防、後背湿地が発達し、かつては起伏に富んだ平野であったことが窺われ、自然堤防上には現集落や遺跡が多数存在している。しかし、大正時代からの耕地整理により多くの自然堤防は削平されている。現在、坂井市域は福井県内有数の穀倉地帯であるが、その要因の一つに坂井平野を潤す幹線水路の十郷用水の存在が挙げられる。十郷用水は、かつての旧河道を奈良時代以降に統合・整備したものが原型となったと考えられている。今日の十郷用水は九頭竜川右岸、ちょうど扇状地の扇頂付近にあたる永平寺町鳴鹿なりかに設けられた鳴鹿大堰を取水口とし、途中、幾筋にも分流し、坂井平野一円を潤している。調査地から南約700mの下新庄地籍には分水工が設けられ、用水路が放射状に広がるが、上蔵垣内遺跡は五本の住宅城から水田域へ、北流する水路がさらに枝分かれして広がる分岐点に位置している。



第3図 遺跡周辺の地形図(縮尺1/250,000)

## 第2節 歴史的環境

坂井平野を中心とした主な発掘成果をもとに、簡略に述べる（第1・4図）。

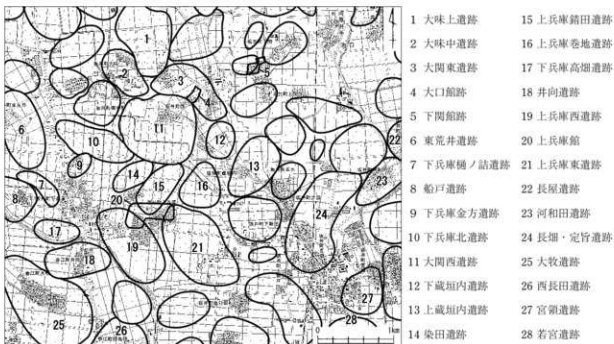
縄文時代の遺跡では、坂井町大関西遺跡（11）において後期の配石遺構や環状にめぐると推定される柱穴がある。坂井町大味地区遺跡群（1・2・3）では自然流路から晩期の土器が出土している。丸岡町舟寄遺跡（第1図）は比較的短期の縄文時代中期の集落である。舟寄遺跡の南に位置する舟寄福島通遺跡（第1図）では晩期の埋設土器が確認され、石冠、石棒、石刀のほか土版などの遺物が出土した。

弥生時代の遺跡は、玉作関連遺物を出土する遺跡が多い。若宮遺跡（28）では中期の方形周溝墓1基、後期の平地式住居5棟の他、遺物には多量の後期の土器、玉作関係遺物が確認された。後期の大型平地式住居、周溝墓の可能性もある円形の溝が確認され、中期と後期にまたがる玉作集落であった可能性がある。長屋遺跡（22）は竹田川によって形成された自然堤防上に位置する。弥生時代終末期の方形周溝墓の他、土坑からは壺形土器棺が2点出土している。河和田遺跡（23）は竹田川・田島川の形成した標高7m前後の自然堤防上に位置する後期後半の玉作遺跡である。

古墳時代では、大味地区遺跡群では、井戸から古墳時代初頭の土器がまとまって出土している。下兵庫北遺跡（10）では古墳時代前期の方墳が2基確認されている。長屋遺跡は6～7世紀の遺構として堅穴住居、井戸などが確認され、住居からは滑石製・土製の小玉、井戸上面からは滑石製の子持ち勾玉が出土している。

律令時代では、上兵庫東遺跡（21）の調査から、初期荘園である「子見村」に比定される集落との関連が推察されている。

中世では、大関西遺跡（11）は11世紀後半から13世紀後半を主体とし、溝・井戸・土坑などが確認された。十郷用水、大口館跡との関連が指摘される。大関東遺跡（3）では「地鎮め」に関連する、銭貨を伴う柱穴が2基確認され、平成21年度の調査では大口館に伴うと考えられる堀の一部を確認している。若宮遺跡は縄文時代から室町時代にわたる複合遺跡である。15世紀後半の200基以上の井戸の他、時期は不明だが、幅約7.5mの道路状遺構が確認されている。



第4図 周辺の主な遺跡（縮尺1/50,000）

### 第3章 遺跡の概要

#### 第1節 層序 (第6・7図)

上蔵垣内遺跡は、坂井市坂井町五本集落とその北に広がる水田域との境に位置し、標高は4.5～5.5 mを測る。調査前は水田であったため、一見すると平坦な景色が広がっているが、これは後世の圃場整備の影響が大きい。広く坂井平野に共通することであるが、自然堤防や後背湿地等の起伏は現在ではまず見ることができない。

今回の調査区の地形であるが、現在の五本集落が位置する南側から延びる微高地が、調査区西側に南北方向に延びており、隣接して用水が北流する東側は緩やかに傾斜している。微高地にあたる調査区の南西側は圃場整備に伴う削平等のため、水田耕作土を除去すると、すぐに黄色砂質土の遺構確認面となり、溝や井戸などの遺構を確認することができた。北西側においては南からの微高地が続くものの、緩やかに低くなるため、水田耕作土以下には、遺物包含層である灰褐色土および黒褐色土層が残存する。しかし、調査区北側は南北方向の溝が集中していたため、黒褐色土層より上の灰褐色土層は、遺物包含層というものの、実際は溝の覆土層と考えられる層であり、東西方向にトレンチを掘削した際に多くの溝の切り合いを確認し、なかなか地山の黄褐色砂質土層に届かない状況であった。調査区の東側は水田耕作土以下、灰褐色土、黒色土、赤褐色～橙褐色を呈す非常に粘性の強い層が堆積していた。調査区の中央部はやや弧状を呈すように谷状に落ち込み、遺跡形成以前に埋没した自然流路跡だと考えられた。調査区西側の遺構確認面である黄色砂質土は東側に移るにつれ粘性が強くなり、東側では色調が黄灰色～青灰色を帯びようになる。この粘質土層上ではD～F区以外に遺構は確認できなかったものの、上面に張り付くように土器・石器が出土した箇所があり、下層確認のためにB～C3・4区にトレンチを掘削した際には、縄文時代晩期の土器が集中して出土した地点があった。しかし、断面観察では掘り込み等は確認出来なかった。これらの遺物は自然流路内の二次堆積によるものであろう。この谷状の落ち込みを境に西側は自然堤防に、東側は水はけが悪く後背湿地であったことが窺えるが、中世以降は埋没しつつ、平地へと変化していったようである。表土直下の面には近世以降の畑作痕と考えられる素掘り溝がまばらではあるが、主に東西方向に走っていた。以下、各層の概略を述べる。

I層は表土であり、耕作土からなる層である。

II層は灰白色～にぶい黄褐色土からなる層である。層厚は30～40cmを測る。中～近世の包含層であるが、明確に層を分けることは困難である。調査区南西部では既に削平されている。土質と色調が類似した層をIIとした。

III層は、黒色～黒褐色粘質土からなる層である。シルト質の間層を含み、層厚は10～30cmを測る。調査区南西部では既に削平されている。古代の包含層に相当する。

IV層は、明黄褐色粘質土～褐色土からなる層である。層厚は10～30cmを測る。東側の低地部では鉄分を多く含んで赤みを帯びており、非常に粘性が強い。遺物の出土量は少ない。

V層は、褐灰色粘質土～黒褐色土からなる層である。層厚は10～30cmを測る。西側では溝の遺構確認面である。東側の低地部にいくにつれ、粘性が強くなる。遺物には弥生土器がある。

VI層は、灰色土からなる層である。層厚は5～10cmを測る。漸移層に相当する。遺物は弥生時代中期の土器を含む。

Ⅶ層は、黄色粘質土～黄褐色砂質土からなる層である。地山であり、最終的な遺構確認面である。西側は砂質を呈するが、東側の低地部に行くにつれ、粘性が強くなる。

## 第2節 遺構の分布状況

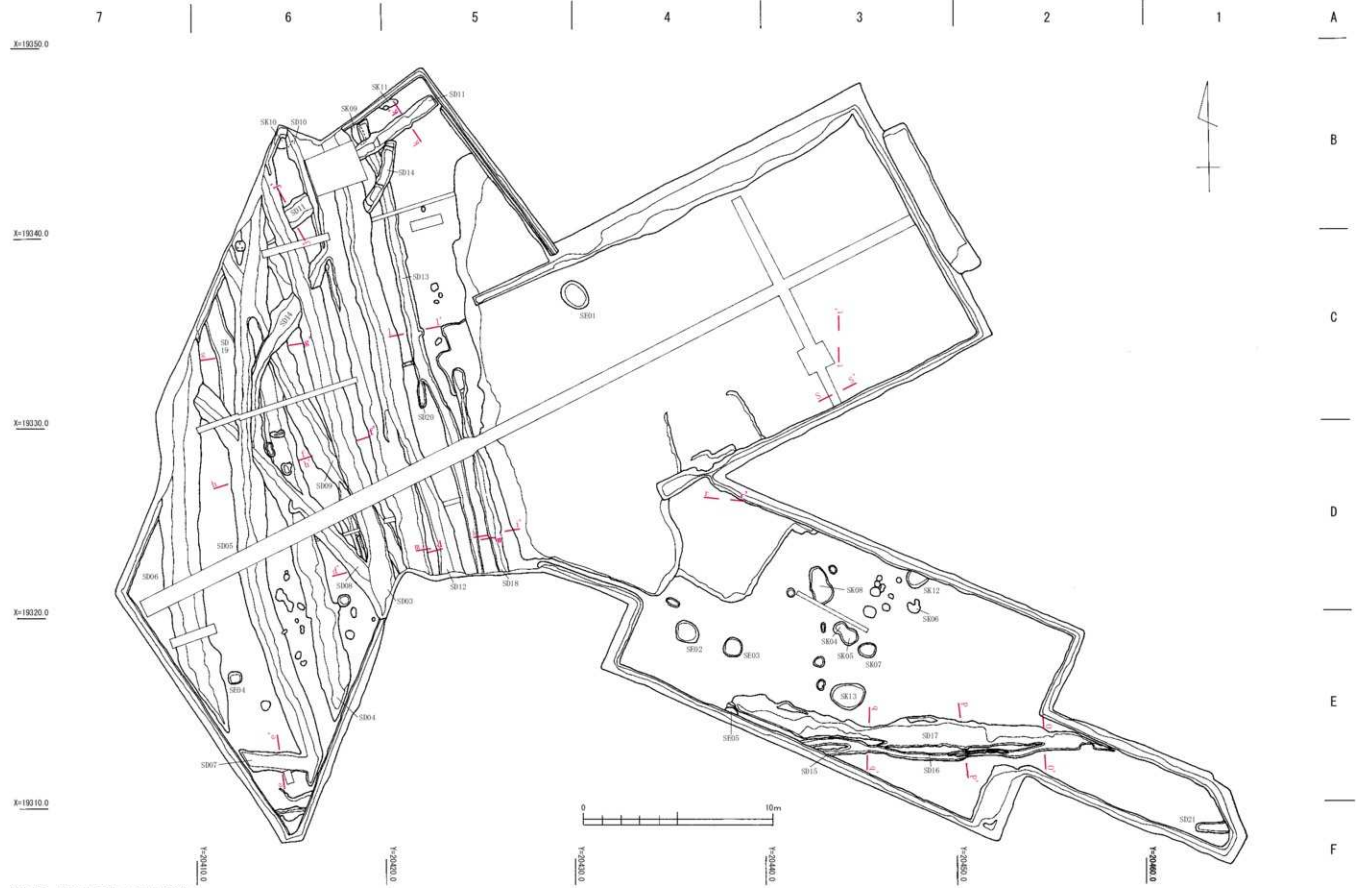
今回の調査面積は約1,200㎡である。調査で検出した遺構は、溝21条、井戸5基、土坑13基、ピット26基である。遺構は、調査区西側の微高地の5～7列、および南側E・F列に集中しており、溝以外は小規模なピット、土坑、井戸があるのみであった。時期は弥生時代、古代、中世のものがある。縄文時代に属す遺構は確認していない。弥生時代に属す遺構には、溝、土坑、ピットがある。土坑、ピットは地山上面で確認したが、浅く、不整形のものが多く、古代の遺構には溝、ピットがある。遺構の数は少なく西側に集中する。中世の遺構には井戸がある。井戸は、本来の掘り込み面はさらに上位であり、その分布は、他の時期の遺構の分布とは一致せず、微高地に限らず中央北よりもあることから、中世の時点では既に湿地ではなくなっており、以後は耕作地として利用されていたようである。

今回の調査区内では建物跡は確認していないため、当地は居住域とは言いがたく、湿地に面した居住区域の縁辺である。弥生時代および律令期の集落は調査区東側の南端で確認した溝より南方および調査区の西方に広がっていたことが窺える。中世以後は畑地としての利用が推察される。

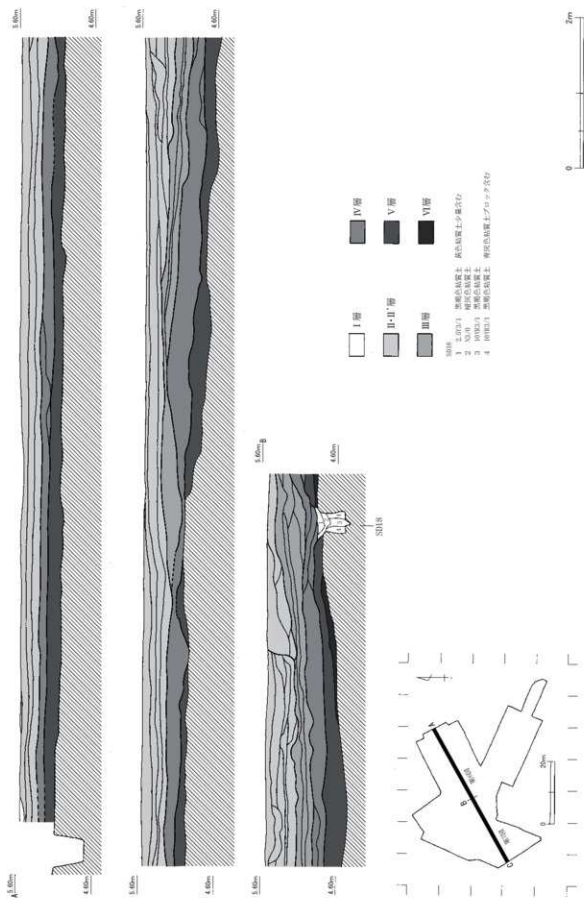
調査は、開始時の表土掘削によって既に遺構確認面近くまで表土を剥いでいたため、南西側はすぐに溝のプランを確認できたが、北側はわずかに包含層が残存していたため、東西方向のトレンチにより各溝の切り合い関係を確認したところ、SD01と02がどの溝にも切られないことから、この2条から掘削をはじめた。この2条は、他の溝の埋没後に構築されたため、写真撮影および固化後に順次他の溝の掘削を行った。SD06については、SD08を切っているだけであったため、他の溝と同時に掘削していった。砂質土層まで掘り込んである溝は湧水のため、特に切りあいが激しいところでは、溝の壁や底面が崩壊していく状況であった。なお、東側については重機である程度包含層を除去したこと、黒色土上面での遺構は確認できなかったことから、地山の黄褐色粘質土上面まで掘削し、遺構の確認を行った。

## 第3節 遺物の出土状況

今回の遺物の出土量は全体に少量であり、また、小片が多かった。遺物には、縄文土器、弥生土器、須恵器、土師質土器、陶磁器、石器、玉作関係遺物、木製品などがある。縄文時代の遺物は、広範囲ではあるが散漫な出土状況を呈している。遺構に混入したものが多いが、D5・6区のトレンチでは地山層からも少量出土している。しかし、遺構を認識するには至らなかった。弥生時代の遺物は、主に中期を中心に、調査区西側、南側の遺構・包含層から出土しており、わずかに後期の土器が含まれる。B5・C3・D4区では、遺構確認面上から少量のまとまりがあり、その近辺からは穂摘具、砥石状石器が出土している。また、少量ながら、玉作関係遺物として、緑色凝灰岩の剥片、石器製作時の調整剥片などが主にB・C5・6区から出土している。古代の遺物は、須恵器を主体に少量の土師器が含まれる。主に、溝・包含層から出土しているものの、その出土量は少ない。これは、南側では包含層が削平されていることもあるが、調査区域が集落の本体とは直接関係しないことによるためであろう。中世の遺物には、土師質皿、砥石、漆器、木製品などがあるものの、総量は少ない。



第6図 遺構配置図 (縮尺1/200)



第6図 東西ベルト土層団(1) (縮尺1/50, 1/1,200)





## 第4章 遺構と遺物

### 第1節 遺構

#### 1 溝 (第9・10図・第2表)

溝は21条検出した。主として調査区西側微高地に集中する。出土遺物は少量のため、個々の溝の時期は特定しがたいが、覆土や切り合いなどから、古代の溝と弥生時代の溝の2時期に大別される。

SD01～04は直線的に南北方向に伸びる溝で、01は緩やかに南から北へ傾斜している。02の南側は断面逆台形を呈すが、北側では浅く断面皿状を呈す。04は底面から須恵器が出土している。SD05・06は西側微高地が伸びる方向に沿うように、弧を描いて並行する溝である。07は東西方向に走り、断面が箱型を呈す。08・09は北西から南東方向に放射状に走る溝である。12は01と同様に南北方向に走るが、底面付近から弥生土器が出土している。底面のレベルは一定しない。13・18は微高地と低地部の境に接するように位置し、18の底面には幅狭い溝が掘り込まれ、板状構造物が設置されていたことが窺われる。区画溝と考える。14は多くの溝に切れ、残存状況は良好でない。15～17、21は調査区南東側の低地部に位置する。他の溝と性格が異なるものである。以下、観察表をもって記述に代える。

#### 2 井戸 (第11図・第3表)

井戸は5基検出した。どの井戸も、概ね平面形は円形を呈し、掘方は筒状となる。また、掘削の際、底面および壁面からの湧水が激しく、掘削中に壁が崩壊する恐れもあり、すべての井戸を完掘してはいない。そのため、井戸構造物の有無を確認しきれないものもある。また、遺物が出土した井戸は、SE02、03、04のみである。特に04は、径が0.7m前後と小型ではあるが、底面が砂層に達し、出土遺物には土師質皿の他、櫛や漆皿、箸状木製品などの木製品、石製品では基石が出土した。04以外は出土量も少なく、また弥生土器や須恵器は混入である。時期は覆土および出土遺物から判断したが、全て中世の井戸である。以下、観察表をもって記述に代える。

#### 3 土坑 (第1表)

V層の黒色土層を掘削し、最終的に地山の黄褐色砂質土層を検出することで遺構を確認した。浅く不整形な土坑が散在する。時期の特定は遺構確認面および覆土から判断した。以下、観察表をもって記述に代える。なお、SK01～03は整理の過程で、井戸であるSEに変更している。

第1表 土坑一覧表

( )は残存値・単位:m

No	区	平面形状	長軸×短軸×深さ	方位(長軸)	出土遺物	備考
SK04	D3	隅丸方形	0.76×(0.62)×0.13	N67°E	—	SK05を切る
SK05	D3	隅丸方形	0.86×(0.80)×0.13	N76°E	—	SK04に切られる
SK06	D3	楕円形	0.74×0.45×0.15	N69°W	—	浅皿状
SK07	E3	円形	0.96×0.78×0.10	N85°W	—	浅皿状
SK08	D3	楕円形	2.02×1.03×0.12	N15°W	—	浅皿状
SK09	B6	楕円形	1.40×0.58×0.06	N17°W	—	浅皿状
SK10	B6	推定楕円形	—×—×0.10	—	弥生土器	SD10に切られる
SK11	B5・6	楕円形	1.00×0.38×0.06	N78°E	—	
SK12	D3	推定楕円形	(0.90)×0.94×0.10	N55°E	—	
SK13	E3	楕円形	1.88×1.40×0.11	N84°E	—	浅皿状

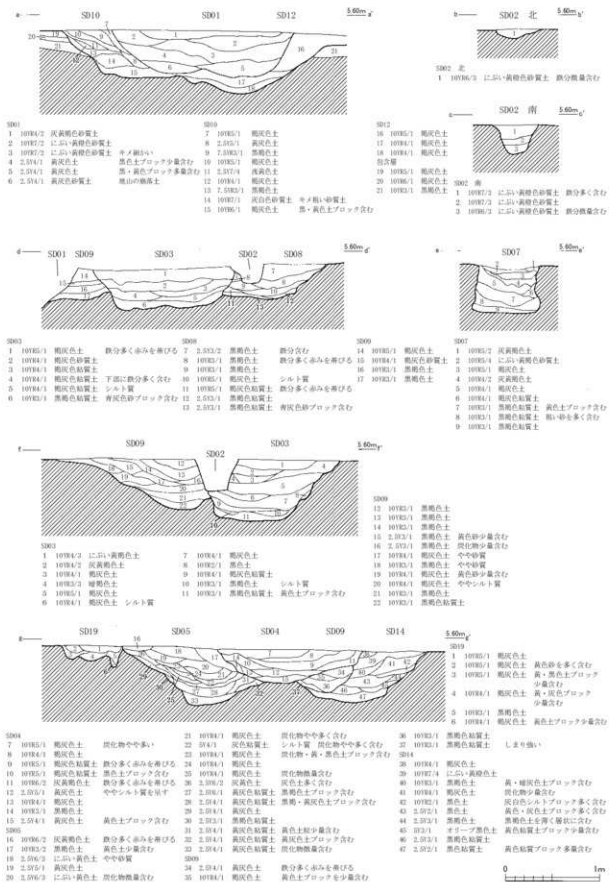


第8図 調査区西側遺構配置図 (縮尺1/60)

第2表 溝一覧表

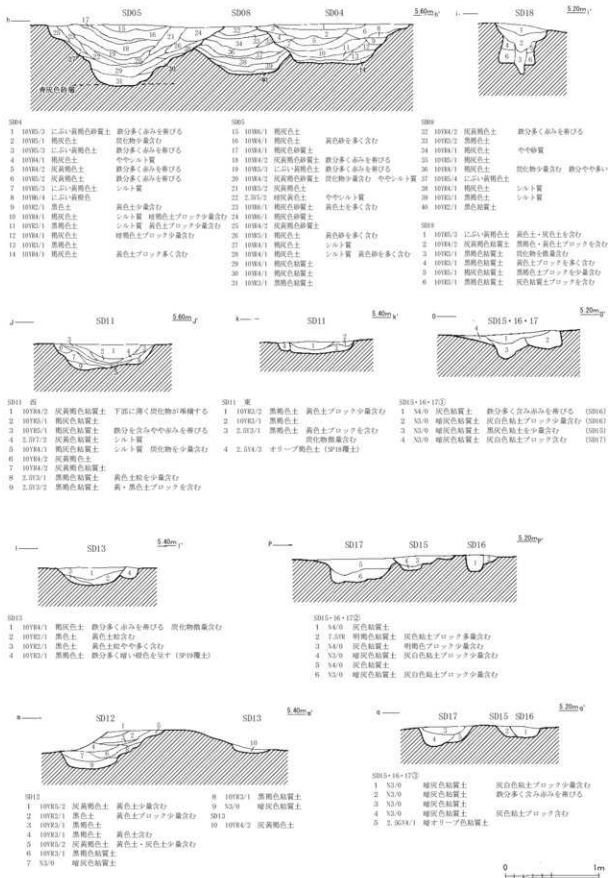
単位: m

No.	区	確認長	幅	深さ	出土遺物	備 考
SD01	B6~D5	24.60	1.80~2.60	0.44~0.56	弥生土器 須恵器 土師器 灰輪陶器	南北に直線的に走る。断面形は逆台形を呈す。数回掘り直されている。時期は古代。
SD02	B6~D6	23.50	0.22~0.50	0.07~0.25	弥生土器 須恵器	南北に直線的に走る。幅狭く、断面形は箱状~浅皿状を呈す。時期は古代。
SD03	B6~ D5・6	24.70	1.22~1.55	0.42~0.56	縄文土器 弥生 土器 須恵器	SD08・09・11・14を切り、SD05に切られる。南北に直線的に走る。断面形は逆台形状を呈す。時期は弥生時代中期。
SD04	C6~E6	16.20	1.10~1.73	0.19~0.33	須恵器	SD05・08・09・14を切る。断面形は浅皿状および逆台形状を呈す水路以外の用途である。断面形は浅皿状を呈す。時期は古代。
SD05	B6~E6	25.30	1.15~1.74	0.38~0.58	須恵器	SD07・08・09・11・14・19を切り、SD04に切られる。断面形は漏斗状を呈す。覆土は砂質土を多く含み、水路としての機能を想定する。時期は古代。
SD06	C6・7 ~ E6・7	20.70	1.70~2.15	0.48~0.66	弥生時代中期の 土器 須恵器	SD08を切る大規模な溝。SD05と並行するように、南北方向に弧状に延びる。断面形は逆台形状を呈し、底面は湧水層まで達する。水路と考えられる。時期は古代である。
SD07	E6	3.20	0.90~1.00	0.45~0.51	弥生土器 土師器	SD05に切られる。東西方向に直線的に延びる。平坦な底面から壁が直立きみに立ち上がり、断面形は箱型を呈す。時期は覆土から古代と推定する。
SD08	C6~D6	14.20	1.00~1.40	0.42~0.57	弥生時代中期の 土器	SD03・04・05・06・19cに切られる。断面形は逆台形状を呈す。時期は覆土および出土遺物から弥生時代と推定する。
SD09	C6~D5	19.60	0.90~1.35	0.44~0.48	弥生時代中期の 土器 玉作り関係遺物	SD14を切り、SD03・04・05に切られる。南東から北西方向へ緩やかに弧を描く。断面形は平円状を呈す。時期は覆土および出土遺物から弥生時代と推定する。
SD10	B6~C6	6.20	—	0.45	弥生時代中期の 土器 土師器 磨石	SD11・14を切り、SD01・12に切られる。SD01と重複するように構築されているため、残存状況は悪い。時期は覆土から古代と推定する。
SD11	B5・6	11.50	0.70~1.25	0.14~0.31	弥生時代中期の 土器 石鏝 磨石	SD14を切り、SD01・05・10・13・19cに切られる。南西から北東方向へ直線的に延びる。時期は覆土および出土遺物から弥生時代と推定する。
SD12	B6~D5	23.40	1.30~1.65	0.30~0.71	弥生時代中期・ 後期の土器 玉作り関係遺物	SD14を切り、SD01・10cに切られる。微高地上の縁辺に位置し、南北方向へ直線的に延びる。深いところでも砂層までは届いていない。断面形は漏斗状を呈す。時期は他の溝との切りあい、覆土および出土遺物から弥生時代後期と推定する。
SD13	B6~D5	24.60	0.50~0.85	0.20~0.30	弥生時代中期お よび後期の土器	SD11・14を切る。微高地と湿地状との傾斜変換点付近に位置し、南北方向へ直線的に延びる。時期は出土遺物から弥生時代後期と推定する。
SD14	B5~C6	17.70	0.60~1.50	0.10~0.43	弥生時代中期・ 後期の土器	SD01~05・09~13cに切られる。SD08との縦後関係は不明、多くの溝に切られているため、残存状況は悪い。弧状に走る。時期は切り合い関係、覆土から弥生時代と推定する。
SD15	E2~E4	13.40	0.30~0.61	0.11~0.27	弥生時代中期の 土器	SD17を切り、SD16に切られる。時期は弥生時代と推定する。
SD16	E2~E4	13.80	0.30~0.37	0.12~0.20	弥生時代後期の 土器	SD15・17を切る。時期は弥生時代と推定する。
SD17	E2~E4	16.30	0.58~0.80	0.22~0.33	木片 弥生時代 中期の土器	SD15・16に切られる。時期は弥生時代と推定する。
SD18	C5~D5	11.00	0.30~0.75	0.12~0.51	縄文時代晩期の 土器 弥生時代 中期の土器	南北方向へ直線的に延びる。幅狭く断面形は箱状を呈す。底面中央に幅狭い溝状の落ち込みがある。覆土は粘質土主体となる。区画のための溝と考えられる。時期は弥生時代と推定する。
SD19	C6	4.50	1.00~1.20	0.17		溝の時期は不明である。
SD20	C5	1.64	0.35~0.40	0.14		SD13との位置関係から、時期は弥生時代と推定する。
SD21	F1	1.70	0.60	0.12		溝の時期は不明である。

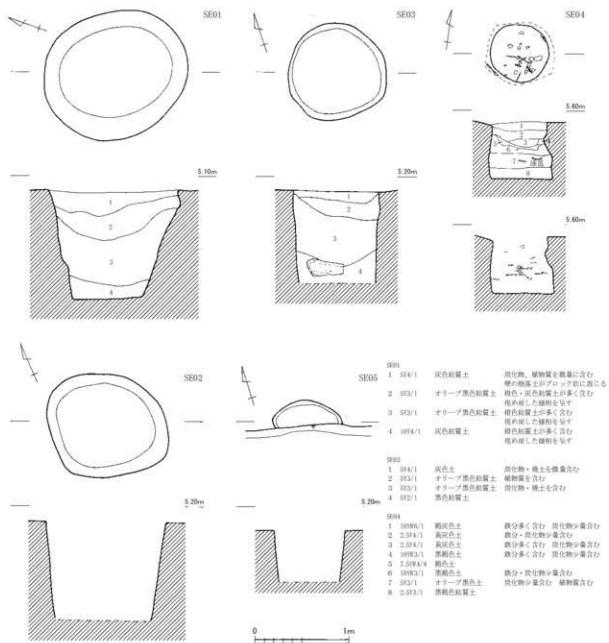


第9図 土層図(1) (縮尺1/40)

第1節 遺構



第10図 土層図(2) (縮尺1/40)



第11図 井戸遺構図(縮尺1/40)

第3表 井戸一覧表

( ) は残存値・単位：m

No.	区	平面形状	長軸×短軸×深さ	出土遺物	備考	時期
SE01	C4・5	円形	1.50×1.30×1.18		筒状・構造物なし	中世
SE02	E4	不正隅丸方形	13.60×1.15×(1.00)	弥生土器 須恵器	筒状・構造物未確認	中世
SE03	E4	円形	1.06×1.02×(1.00)	土師質甕 砥石	筒状・構造物未確認	中世
SE04	E6	円形	0.73×0.68×0.60	土師質甕 碁石 横櫛 漆小皿 箸状木製品 板状木製品 桃種実	筒状・構造物なし	中世
SE05	E4	推定円形	0.70×—×(0.60)		筒状・構造物未確認	中世

## 4 遺構外出土遺物

調査区の東半分、特に北東部にかけてはB・C5区より段状に落ち込み、低地部となる。トレンチの土層観察からは、遺構を確認することは出来なかった。最終確認面は極めて粘性の強い黄褐色土となり、鉄分を多く含むためか赤味を帯び、上面を削った後しばらくすると変色する具合であった。C3区では、その黄褐色粘質土面から不明石器および土器が出土しているものの、この面が生活面とは考えにくく、これらは低湿地への流れ込みであったと想定している。また、B5・D4区の包含層中・遺構確認面上面からも、土器集中区および石器が出土している地点がある。これらも同様に、本来は包含層中に存在した遺構に伴うもの、流水による二次堆積によるものとする。

## B5区土器集中地点（第12図）

B5区内のSD14の東側の確認面上面で、弥生時代中期の土器の集中と穂柄具1点を確認した。土器は0.65m×0.4mの範囲にまとまり、その約0.3m西からは穂柄具が刃部を下にして出土している。確認面の上面形状に沿うように土器が集中し、本来は浅皿状の遺構と考える。

## C3区出土土器（第12図）

遺構確認面上で、0.46×0.32mの範囲にまとまる、弥生時代中期の土器片を確認した。

## C3区出土石器（第12図）

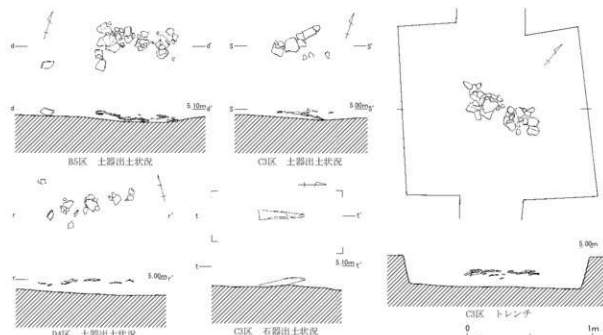
遺構確認面上に張り付くような状態で確認した。長軸方向を南北に向け、刃部状の平坦部を水平にした状態で出土している。

## D4区出土土器（第12図）

遺構確認面上で、0.8×0.4mの範囲にまとまる弥生時代中期の土器片を確認した。

## C3区トレンチ出土土器（第12図）

南北トレンチ掘削中、確認面から約10cm下の青灰色粘質土層中から縄文時代晩期の土器片が出土したため、掘削範囲を拡張した。径0.3～0.4mの2つのまとまりとなる。



第12図 遺物出土状況図（縮尺1/30）

## 第2節 遺物

### 1 縄文土器 (第13図1~16)

時期は晩期後葉に限定される。1~6は有文土器である。1は「く」字状を呈す深鉢または鉢の口縁部であり、下野式に比定される。頸部には沈線と組み合う短沈線列を配す。2は鉢であり、浮線文系土器である。体部上端の沈線区画帯内に3条の沈線によるレンズ状文を配す。レンズ状文の連結部は突出しない。3~6は同一個体の浅鉢であり、工字文系土器である。口縁屈曲部に単位的な押圧と凹線を施す隆帯を貼付する。直下に4条の平行沈線を配し、3の下端沈線には文様集約部が認められる。7~16は無文土器である。7~14は縦位条痕を施す在地系統の甕置式である。壺の可能性のある12~14以外は深鉢である。7・8は横位ナデにより条痕を磨り消し、口縁無文部を形成する。12・13は頸部に横位条痕を施す。15・16は同一個体の壺である。条痕の原体や施文方向の差異から、7~14より時間的に後出する土器の可能性はある。

### 2 弥生土器 (第13図17~19、第14図)

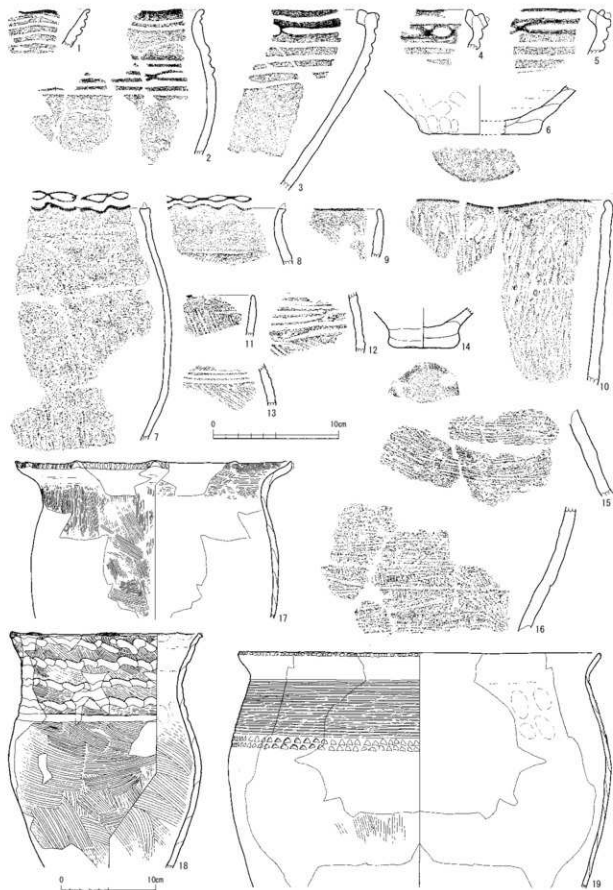
**中期の土器** (第13図17~19、第14図1~30) 文様の描出方法や調整系譜の推測により、櫛描文系・条痕文系・沈線文系として3大別した。これらはおおむね畿内第Ⅱ様式後半に併行すると考える。

**櫛描文系** (第13図17・19、第14図3~16) 壺 (第14図3~9) と甕 (第13図17・19、第14図10~16) がある。壺の頸部・体部の文様には、直線文とその下端の刺突文列 (4)、直線文とその間の押圧文 (9)、波状文と直線文 (6)、直線文と対向扇形文による擬流水文 (7・8)、刻目貼付突帯および突帯間の波状文と直線文 (5) がある。第14図3は口縁端部に浅い直線文を2条配し、頸部は無文とする。甕の口縁端部には、明確に面をもつもの (第13図17・19、第14図10・11) と端面が弱く口縁部と一体となるもの (第14図12~16) の2種がある。口縁端部の加飾には、ヘラ状工具のキザミ (第13図17・19)、ハケ原体のキザミ (第14図11~13)、ハケ施文 (同図10)、内外面交互押圧 (同図14)、単位押圧のみ (同図15)、連続押圧 (同図16) などがあり、多様である。その他、外反する口頸部を無文様とするもの (第13図17・19) とハケ調整のもの (第14図10~16) がある。第13図17は口縁端部に10単位の押圧とキザミを施す。同図19は大形の甕であり、胴部上半に櫛描直線文と上下2連の三角形押し引き文列を配す。外面調整は縦位のナデあるいはミガキを施す。

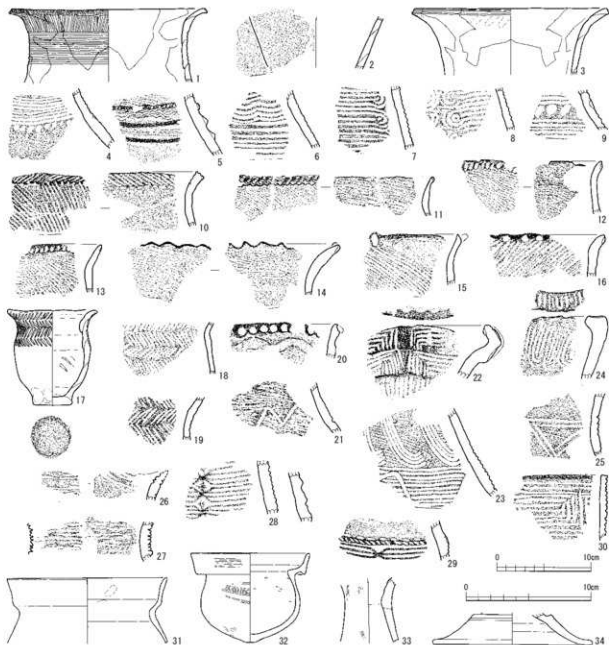
**条痕文系** (第13図18、第14図1・2・17~24) 壺 (第14図21~23) と甕 (第13図18、第14図1・2・17~20)、鉢 (第14図24) がある。第14図22は受口状口縁を呈す。口縁部には屈曲部を境として、下方を開放する櫛描重方形文を上下に配す。方形文は横方向が櫛描、縦位方向がヘラ描で描出される。同図21は粗い横位条痕地にヘラ描鋸歯文、同図23は浅い斜位条痕地に跳ね上げ文と直線文を施し、直線文上にヘラ描波状文を上書きする。第13図18は口縁部が緩やかに外反する甕であり、口頸部が比較的長い。口頸部全域に指ナデ状の浅い凹線による波状文4条と直線文1条を施す。調整は二枚貝条痕であり、口縁端部にも8単位で押圧状に条痕を施す。文様とその描線の類似例には第14図20があるが、20は口縁端部に連続押圧を施す点で異なる。第14図1・2は同一個体である。口頸部全域に縦位・横位の直線文を配し、胴部下半は無文とする。器形はやや長胴化すると推測される。同図17~19は羽状文を施す甕である。いずれも羽状文の幅は狭い。17は小形土器で、口頸部に横位のヘラ描羽状文を2段施す。同図24は上方を向く口縁端部に櫛描短直線文を施し、口縁部に跳ね上げ文の文様を施す。

**沈線文系** (第14図25~30) 主にヘラ描文を施し、ナデ調整を施す土器を一括した。壺 (25~29) と鉢 (30) がある。25は頸部に鋸歯状半截竹管文を施す。26は波状口縁を呈し、内面に口縁形に沿った





第13圖 縄文土器・弥生土器(1)実測図(縮尺1~16:1/3、17~19:1/4)



第14図 弥生土器(2)実測図(縮尺1~3・31~34:1/4, 其他:1/3)

弧線文を施す。28は多条の平行直線文を施した後、強いナデを施す。28・29は浮線文系土器(第13図2)と類似する長六角形文を施す。ともに長六角形文の連結部は陰刻により描出される。29は頸部と体部の境に段をもち、段の直上に押し引き、直下に斜位キザミを施す。キザミは区画上端線として理解される。30は器壁が薄く、口縁端部に面をもつ。ヘラ描重方形文を施す。

後期の土器(第14図31~34) 31は甕である。32は小型の鉢であり、33・34は脚部である。

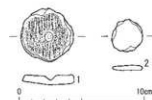
### 3 土製品(第15図)

弥生土器片を円盤状に加工したものである。

### 4 石器(第16図)

1~3は打製石鏃である。1は平基有茎鏃、2は凹基無茎鏃、3は未成品である。4は石錐で、基部の一部と錐部の先端が欠損する。5は扇形を呈す穂摘具で、外湾する刃部を研磨によって作り出す。6

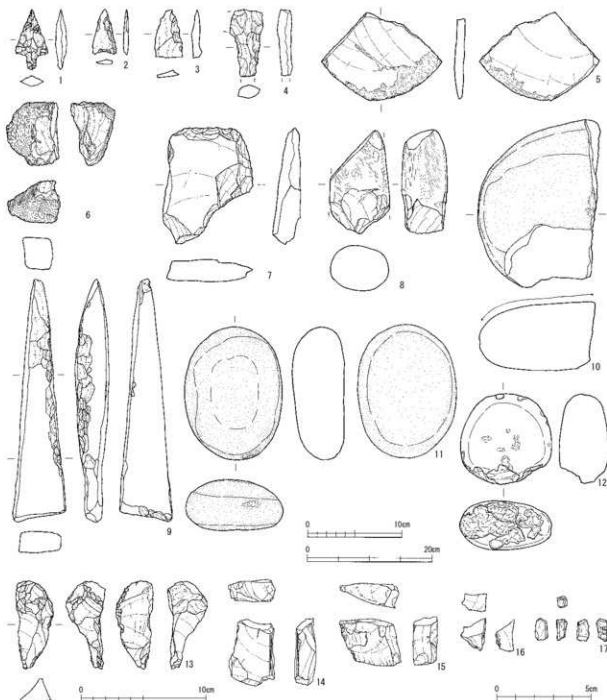
は石核である。7は打製石斧であるが、刃部を大きく欠損する。8は刃部と基部を欠損する大型蛤刃石斧である。9は用途不明の石器である。撥状に開くが側面形は紡錘形状となる。平坦な面を有し、使用痕は確認できない。10は台石である。11・12は磨石および敲石としての機能を有す。13～17は玉作りに関するものである。13は荒割段階、14・15は形割段階のものである。16は施溝痕を有す剥片、17は角柱段階のものである。



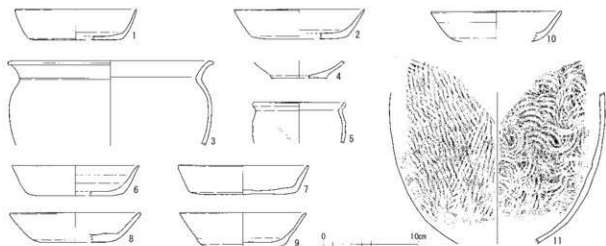
第15図 土製品実測図  
(縮尺1/3)

#### 4 溝出土遺物 (第17図)

1～4はSD01から出土した。1・2は須恵器の無台坏である。平坦な底面から1はやや内湾ぎみに、



第16図 石器実測図 (縮尺1～4・14～17:1/2, 13:1/3, 9:1/6, その他:1/4)

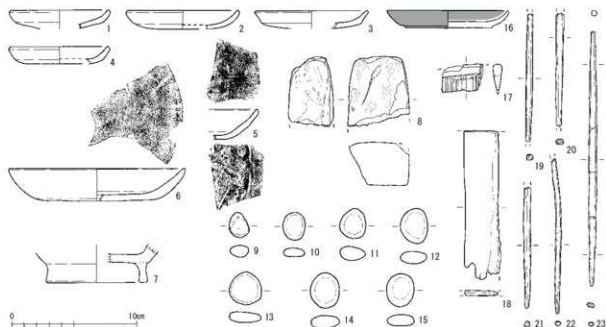


第17図 古代の遺物実測図 (縮尺1/4)

2は直線的に先細りする口縁が立ち上がる。3は鉢である。4は土師質土器の坏底部である。5～9はSD04から出土した。5は土師質土器の小型甕である。内外面を丁寧なヨコナデで整形し、口縁は受口状に短く立ち上がる。6～9は須恵器の無台坏である。底面からやや鋭角に先細りする口縁が立ち上がる6・7と、丸みを帯びて立ち上がる8・9がある。10はSD05・06間で破片が接合した須恵器の無台坏である。底面から丸みを帯びて口縁が立ち上がる。11はSD10から出土した須恵器の甕である。外面は平行線文、内面は同心円文の叩きを施す。

## 5 中世の遺物 (第18図)

1～6は土師質皿である。口径が8～9cmにまとまる1～4と、口径14cm以下の5・6に分けることが出来る。7は灰軸陶器の壺底部である。8は砥石である。9～15は小円礫を素材とした礬石である。9は黒石で他より小振り、10～15は白石である。16～23は木製品である。16は漆器の小皿である。外面、見込み内とも黒漆を塗布する。17は櫛である。18は不明板材である。19～23は箸状木製品である。



第18図 中世の遺物実測図 (縮尺1/3)

## 第2節 遺物

第4表 縄文土器・弥生土器観察表

数値は残存値(単位:cm)

種別番号	区	遺構・部位	器種	口径	底径	器高	文様・調整	色別		出土	備考
								外面	内面		
第13001	D6 11X	V	縄文 深鉢/鉢	-	-	-	(口) 波状文・直線文・刷込波線列	黒灰	黒灰	①	
第13002	C5 4IX	V	縄文 鉢	-	-	-	(口) 直線文・体) レジズ状文	黒灰	黒灰	①	
第13003	D6 SD03	SD03-遺	縄文 鉢	-	-	-	(口) 直線文・体) レジズ状文	黒灰	黒灰	①	
第13004	D5	遺	縄文 浅鉢	-	10.0	-	(口) 磨研文・内縁(体) 長六角形文	灰黄	灰黄	②	(外) 炭化物
第13005	D6	遺	縄文 浅鉢	-	-	-	(内) ナデ・底) ナデ	灰黄	明褐色	②	
第13006	D5	遺	縄文 深鉢	-	-	-	(口) 磨研文・内縁(体) 磨研ナデ 刷) 刷込直線文	灰黄	にぶい黄橙	③	
第13008	D5	遺	縄文 深鉢	-	-	-	(口) 磨研文・内縁(体) 磨研ナデ 刷) 刷込直線文	明褐色	にぶい黄橙	③	
第13009	D5 1IX	V	縄文 深鉢	-	-	-	(口以下) 斜紋直線	にぶい黄橙	明褐色	③	
第13010	C5	遺	縄文 深鉢	-	-	-	(口以下) 刷込直線	黒陶	明褐色	②	
第13011	D7 SD06	SD06	縄文 深鉢	-	-	-	(口以下) 刷込直線	明褐色	明褐色	①	
第13012	C7 3IX	V	縄文 笠/深鉢	-	-	-	面) 刷込直線(体) 斜紋直線	黒灰	にぶい橙	①	
第13013	H5 4IX	V	縄文 笠/深鉢	-	-	-	面) 刷込直線(体) 斜紋直線	明褐色	にぶい黄橙	①	
第13014	E6	SD05	縄文 笠/深鉢	5.6	-	-	体) ナデ・底) ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	②	
第13015	C3 ①	遺	縄文 鉢	-	-	-	体) 磨研二枚貝直線	にぶい黄	黄橙	②	
第13017	D4 2IX①	遺	弥生 甕	29.3	-	-	(口縁) 10単位厚圧・キヤミ(口内) 磨研ハケ (口) 磨研ナデ 刷) 刷込・斜紋ハケ	浅黄橙	浅黄橙	②	
第13018	H5 ②・③	遺	弥生 甕	20.5	-	-	(口縁) 8単位厚圧(口) 磨研波状文・直線文 (口以下) 斜紋一枚貝直線(内) 斜紋二枚貝直線	黒陶	浅黄橙	①	
第13019	C3 4IX	I	弥生 甕	38.5	-	-	(口) 磨研(体) ヘラ磨研直線文5条4段・ 三角刺突文列・ナデもしくはミヤガ	黄橙	黄橙	①	
第14001	H5 1IX C5	V	弥生 甕	21.1	-	-	(口) 直線(口) 刷込直線・刷込直線5条 面以下) ナデ	にぶい黄橙	橙	③	
第14002	H5 4IX	V	弥生 甕	-	-	-	刷込	明褐色	明褐色	①	
第14003	C6 1IX	V	弥生 甕	20.9	-	-	(口) 磨研直線文・面以下) ナデ	灰白	灰白	①	
第14004	H6	V	弥生 甕	-	-	-	面) 磨研直線文4条・刷込文列1条	灰白	灰白	①	
第14005	H5 4IX	V	弥生 甕	-	-	-	面) 磨研分室3条・内1条にキヤミ・磨研直線文・ 内直線文	にぶい橙	にぶい橙	③	胎土に黒帯母 輸入品か
第14006	H6	SD10	弥生 甕	-	-	-	面) 磨研直線文・内直線文	灰白	浅黄橙	③	
第14007	H5 4IX	V	弥生 甕	-	-	-	面) 磨研直線文3段4条	にぶい橙	明灰	①	
第14008	C5 2IX	V	弥生 甕	-	-	-	面) 磨研直線文2段・内直線文1条	にぶい橙	にぶい赤陶	①	
第14009	H6	SD03	弥生 甕	-	-	-	面) 磨研直線文2段・内直線文1条	浅黄橙	灰白	①	
第14010	H5 1IX C3	SD17	弥生 甕	-	-	-	(口) ハケ(口) ハケ	明褐色	浅黄	③	
第14011	H6 C5	SD01	弥生 甕	-	-	-	(口) キヤミ(口) ハケ(内) ハケ	浅黄橙	にぶい橙	③	
第14012	C5	V	弥生 甕	-	-	-	(口) キヤミ(口) ハケ(内) ハケ	黒陶	橙	③	
第14013	D6	SD03	弥生 甕	-	-	-	(口) キヤミ(口) ハケ	灰白	灰白	③	
第14014	C6	SD08上層	弥生 甕	-	-	-	(口) 内外磨研(口) ハケ(内) ハケ	にぶい黄橙	灰白	⑤	
第14015	C6 2IX	V	弥生 甕	-	-	-	(口) 磨研(口) ハケ(内) ハケ	明灰	灰黄	①	
第14016	H6	遺	弥生 甕	-	-	-	(口) 磨研(口) ハケ	明褐色	にぶい黄橙	①	(内) 炭化物
第14017	H5 4IX	V	弥生 小形土器	7.1	3.1	7.5	(口) ヘラ磨研直線文2段・刷) ナデ	浅黄橙	明褐色	①	
第14018	H6	遺	弥生 甕	-	-	-	面) 刷込直線文2段	明褐色	黒陶	①	(内) 炭化物
第14019	C6	SD14	弥生 甕	-	-	-	面) 刷込直線文2段	灰陶	黒陶	①	
第14020	H6	V	弥生 甕	-	-	-	(口) 磨研(口) 磨研直線文	灰陶	明褐色	①	
第14021	C6	SD03	弥生 甕	-	-	-	(口) ヘラ磨研直線文・刷込直線	にぶい橙	にぶい橙	③	
第14022	C5	V	弥生 甕	-	-	-	(口) 刷込分室付文・磨研直線(面) 刷込直線	灰白	浅黄橙	①	
第14023	H6 3IX	V	弥生 甕	-	-	-	面) 磨研波状文(口) 磨研直線文・ヘラ直線文	にぶい橙	灰陶	①	
第14024	C5	V	弥生 鉢	-	-	-	(口) 磨研直線文(口) 磨研縁上げ文	灰白	にぶい橙	①	
第14025	D5	V	弥生 甕	-	-	-	面) 三角形手取竹管文	灰白	浅黄橙	①	
第14026	C5 2IX	V	弥生 甕	-	-	-	(口) ヘラ直線(口) 波状文	明灰	黒陶	①	
第14027	C6	SD03上	弥生 甕	-	-	-	面) ヘラ磨研直線文	黒陶	にぶい橙	③	
第14028	H5	V	弥生 甕	-	-	-	(口) 長六角形文	灰白	にぶい黄橙	③	
第14029	C3 4IX	SD10	弥生 甕	-	-	-	面) 磨研(長六角形文・押し印引き文・斜紋キヤミ)	灰白	明褐色	①	
第14030	C3 4IX	遺	弥生 鉢	-	-	-	(口) 磨研直線	明褐色	明褐色	①	
第14031	C5	遺	弥生 甕	17.0	-	-	磨研不明	浅黄橙	明褐色	①	
第14032	C5 1IX C5 C6 2IX	SD13 遺 SD12	弥生 鉢	12.6	1.1	9.4	(口) 磨研直線(体) ハケ	浅黄橙	浅黄橙	③	(内) 赤銅質
第14033	C5	遺	弥生 高杯/器台	-	-	-	(口) ミヤガ	浅黄橙	にぶい黄橙	①	
第14034	H5-6 H6 2IX C5	I 遺 遺	弥生 高杯/器台	-	17.0	-		浅黄橙	浅黄橙	①	

第5表 石器観察表

数値は残存値(単位:cm・g)

種別番号	区	遺構・部位	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材	残存・備考
第16001	D6 3IX	V	打製石鏃	3.20	1.70	0.60	2.05	チャート	完形・有漆
第16002	D5 4IX	V	打製石鏃	2.30	1.30	0.25	0.64	安山岩	完形・片蓋
第16003	H6	SD03	打製石鏃(未完成品)	2.59	1.55	0.60	1.65	安山岩	完形
第16004	H6	SD11	石鏃	3.58	1.83	0.81	5.31	安山岩	完形・基部欠
第16005	H5	V	黄色土上面	9.30	12.79	1.31	152	デイキサイト	片蓋・基部欠
第16006	H6	V	黒色土層	6.70	4.60	4.50	170	安山岩	一面
第16007	H4	遺	打製石斧	12.30	9.62	2.92	343	凝灰岩	基部欠
第16008	H5	V	大型磨石片刃	10.90	6.40	4.75	443	安山岩	基部・基部欠
第16009	C3	V	不明石斧	27.80	8.25	5.20	1520	デイキサイト	完形
第16010	H6	SD11	磨石・石台	12.70	13.00	7.29	2119	砂	1/2以上欠
第16011	H6	SD10	磨石	14.10	10.38	5.45	1299	砂	完形
第16012	D3 4IX	V	磨石	9.52	9.69	5.20	799	デイキサイト	完形・磨打痕あり

## 第4章 遺構と遺物

第6表 土製品観察表

数値は残存値

神回番号	区	遺構・層位	器種	法				胎土	備考
第15041	B6		土製円盤	長軸 4.15cm	短軸 4.10cm	厚さ 0.70cm	重量 13.76g	口径 0.70cm	② 未良透
第15042	B6 3F	IV	土製円盤	長軸 2.55cm	短軸 2.40cm	厚さ 0.40cm	重量 3.08g		②

第7表 玉作り関係遺物観察表

数値は残存値(単位:cm・g)

神回番号	区	遺構・層位	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
第16013	D5	SD03	玉輪	6.90	2.95	3.18	43.67	緑色凝灰岩	
第16014	B6	黒色土層	形物	3.56	2.45	1.10	12.13	緑色凝灰岩	長軸に施溝深1条
第16015	C6 2F	V	形物	2.52	3.20	1.30	10.57	緑色凝灰岩	
第16016	B5 4F	VI	洞片	1.70	1.31	0.99	1.64	緑色凝灰岩	長軸に施溝深1条
第16017	B6	IV	角柱	1.15	0.61	0.64	0.60	緑色凝灰岩	長軸に2条、短軸に1条の施溝 2面研削 欠損

第8表 古代の土器観察表

数値は残存値(単位:cm)

神回番号	区	遺構・層位	器種	口径	残存高	底径	調整・施文		色調	胎土	焼成	残存率	備考
第17001	C6	SD01	瓶忠器 杯	12.9	3.2	10.0	外) 回転ナデ 底: 回転ヘラ切り残ナデ 内) 回転ナデ		灰色	②	良	1/6	
第17002	D5	SD01	瓶忠器 杯	13.9	3.2	10.4	外) 回転ナデ 底: 回転ヘラ切り残ナデ 内) 回転ナデ		灰色	②	良	1/12以下	
第17003	B6 C6	SD01 試掘	瓶忠器 鉢	21.0	9.1	-	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ		灰黄色	②	良	口縁5/12	
第17004	C6	SD01上面	土師器 杯	-	1.9	6.0	外) ナデ 底: 回転糸切り ナデ		浅黄褐色	②	良	底部片	
第17005	C-D6	SD04	土師器 壺	9.8	4.4	-	外) ハナ後ヨコナデ 内) ヨコナデ		灰黄褐色	②	良	口縁1/4	煤付着
第17006	D6	SD04上面	瓶忠器 杯	13.5	3.25	10.4	外) 回転ナデ 底: 回転ヘラ切り残ナデ 内) 回転ナデ		灰白色	②	良	2/5	
第17007	-	SD04	瓶忠器 杯	13.9	3.15	11.3	外) 回転ナデ 底: 回転ヘラ切り残ナデ 内) 回転ナデ		灰白色	②	良	1/4	
第17008	C6	SD04-2	瓶忠器 杯	13.8	3.2	9.0	外) 回転ナデ 底: 回転ヘラ切り残ナデ 内) 回転ナデ		灰白色	②	良	口縁1/8	
第17009	-	SD04-3	瓶忠器 杯	13.5	3.3	9.0	外) 回転ナデ 底: 回転ヘラ切り残ナデ 内) 回転ナデ		灰白色	②	良	2/5	
第17010	C6	SD05土層 SD06	瓶忠器 杯	13.7	3.2	8.0	外) 回転ナデ 内) 回転ナデ		灰色	②	良	口縁1/4	
第17011	B6・C6	SD10	土師器 壺	-	-	-	外) タケキ 内) 当て具底		浅黄褐色	②	良	底部片	

第9表 中世の土器観察表

数値は残存値(単位:cm)

神回番号	区	遺構・層位	器種	口径	残存高	底径	調整・施文		色調	胎土	焼成	残存率	備考
第18001	E6	SE04	土師器	7.7	1.5	-	外) 回シナデ 内) 回シナデ		に濃い褐色	①	良	1/4	
第18002	E6	SE04	土師器	8.7	1.5	7.5	外) 回シナデ 内) 回シナデ		に濃い褐色	①	良	口縁1/5	
第18003	E6	SE04	土師器	8.8	1.4	8.0	外) 回シナデ 内) 回シナデ		浅黄褐色	①	良	1/6	
第18004	E6	SE04	土師器	7.7	1.4	7.0	外) 不明 内) 回シナデ		に濃い褐色	①	良	口縁1/4	
第18005	E6	SE04	土師器	-	2.4	-	外) 回シナデ 磨オヤス 内) 回シナデ		浅黄褐色	②	良	口縁部片	
第18006		SE03	土師器	13.8	2.6	9.8	外) 回シナデ 内) 回シナデ		に濃い黄褐色	①	良	1/5	
第18007	C6	SD01上面	灰褐色器 壺	-	3.0	7.8	外) 回転ナデ 底: 回転ヘラ切り残ナデ 内) 回転ナデ 高台継付け		灰白色	①	良	底部1/6	高台内無縁 3耳寛小

第10表 中世の石製品観察表

数値は残存値(単位:cm・g)

神回番号	区	遺構・層位	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	残存・備考	
第18008	E4	SE03土層	碇石	5.50	4.90	3.42	-	1/2以上欠・使用面欠損	中砥石
第18009	E6	SE04	小円礫(礫石)	2.02	1.62	0.95	4.02	完形・黒石	
第18010	E6	SE04	小円礫(礫石)	2.20	1.70	0.65	3.78	完形・白石	
第18011	E6	SE04	小円礫(礫石)	2.45	2.10	1.10	7.28	完形・白石	
第18012	E6	SE04	小円礫(礫石)	2.73	2.12	0.98	8.36	完形・白石	
第18013	E6	SE04	小円礫(礫石)	2.61	2.51	0.79	7.61	完形・白石	
第18014	E6	SE04	小円礫(礫石)	2.80	2.32	0.95	9.36	完形・白石	
第18015	E6	SE04	小円礫(礫石)	2.59	2.20	1.10	8.08	完形・白石	

第11表 中世の木製品観察表

数値は残存値(単位:cm)

神回番号	区	遺構・層位	種類	長さ	幅	厚さ	残存・備考	
第18016	E6	SE04	漆器 小皿	口径 9.6	器高 1.4	底径 6.8	3/4	内外面黒漆 継接: ケナキ
第18017	E6	SE04	瓶軸	3.3	2.3	0.7	1/2以上欠損	
第18018	E6	SE04	瓶片	11.8	3.0	0.4	1/2以上欠損	
第18019	E6	SE04	箸状木製品	9.6	0.6	0.5	1/2以上欠損	先端部にコゲ痕あり
第18020	E6	SE04	箸状木製品	12.3	0.5	0.5	土層部欠損	歪みあり
第18021	E6	SE04	箸状木製品	8.9	0.7	0.4	両端部欠損	中央部2扁平となる
第18022	E6	SE04	箸状木製品	10.1	0.6	0.4	両端部欠損	やや扁平となる
第18023	E6	SE04	箸状木製品	20.1	0.6	0.4	完形	

## 第5章 まとめ

今回の発掘調査で確認した遺構は溝、井戸を主体とする。特に溝は、弥生時代のもので古代のものが混在している様相であった。これらのことから、当地は居住域ではなかったと言える。

遺構は確認できなかったものの、わずかに出土した縄文時代の遺物についてみると、これまで沖積平野である坂井平野では、中期の集落遺跡として舟寄遺跡が報告されているものの、舟寄遺跡以外の遺構・遺物の確認例は乏しい。晩期になると遺構・遺物の報告例が増加するが、この場合、弥生時代中期の遺構・遺物と近接して確認される例が多く報告されている。また、土器の出土例では、遺構の平面形や掘り込みを確認出来る例は多くないのが現状である。今回の縄文時代晩期の遺物は、地山が形成されつつある過程に含まれたものであり、当時は流路が存在したと推定する。

弥生時代に関しては遺構・遺物は限定的である。遺物は、後世の遺構に混入したものが多く、遺構の時期を特定するものは限られる。弥生時代の溝は、SD03・08・09・11～18である。特に西側で確認した溝の重複関係および出土遺物からこれらの前後関係を考えると、SD08・09・14を切るSD03が最も後出し、SD09～13に切られるSD14が最も先行する溝である。調査範囲内では重複せず、前後関係を把握出来ないものもあるが、弥生時代中期から後期にかけて掘削・使用されており、北方へ放射状に展開し、直線的のものが多い。その多くが南から北へ傾斜しており、南方の自然流路から引水するための水路と考えると、近辺には農耕地の展開が想定でき、穂摘具の出土もそのことを示唆する。平成22年度に県埋文センターが実施した土蔵垣内遺跡の調査（第2図）では、少量の縄文土器が出土しているものの、弥生時代の遺構・遺物は確認していないため、集落域は北西部へは広がらないようである。土器についてみると、北陸地方に伝わった櫛描土器と、その手法の影響を受けた条痕文系土器、そして東海地方の影響を受けた沈線文系土器が共存する中期前葉の後半段階を主体とする。

古代の遺構については、8世紀代に属す溝があり、直線的に南北方向に走るSD01・02・04と、緩やかに弧を描くSD05・06がある。溝の規模ではSD02のような幅の狭い浅いものからSD06の様な幅約2.1m、深さ約0.6mのものがあり、弥生時代と同様に、この地に集中して溝を掘削する必要または適地であったことが窺える。溝の前後関係を見ると、SD01・02・04に先行するSD05があり、さらにSD07が先行する。SD06は、出土した須臾器の坏がSD05から出土した破片と接合する（第17図10）ことから、SD05と近い時期が考えられる。溝の用途は用排水路と考えるが、今回の調査地である坂井町五本地籍周辺は、奈良時代に条里地割が設けられたことが確認されている。また、当地の北西に位置する坂井町蔵垣内から上兵庫にかけては東大寺領莊園子見莊に、東北に位置する同町桑原から伊井にかけては同じく東大寺領溝江莊が位置している。子見莊と溝江莊に関して、天平神護二年（766）の東大寺領莊園に関する東南院文書に、「五百原堰」から取水するための溝の開削計画書が残されている。それによると、溝の幅は両側の土堤各一五尺を含む六尺（約1.8m）、深さは土堤上から溝底面までの三尺（約0.9m）とされる。五百原堰は、その名称から「五百原溝」という幹線水路に設けられたようである。その場所は、現在の坂井町下新庄辺りとされるが、現在の十郷用水も同じく下新庄地籍の御定水門により分水されている。十郷用水の起源に関しては平安時代末期の伝承があるものの、すでに利用されていた旧来の九頭竜川の流れや開削された水路を、計画的に統合・整備したものが十郷用水へと発展していったと考えられていることから、五百原溝は十郷用水の原型の一つと考えられる。このことから推定すると、十

郷用水として統合・整備される以前から、下新庄地籍から五本地籍にかけては、基幹水路から取水する適地、そして堰を管理する要地であった。また、前述の溝江荘に関する溝の開削に関して、一部五百原溝に沿って開削される溝があることも記されており、並行して走る水路網の存在が窺える。これに関し、当遺跡の古代に属する溝SD05とSD06は、やや東北方向に曲がっていくその先に桑原荘が位置することから、荘園開発との関連を考えたい。十郷用水の成立は、当時の坂井平野の開発に重要な要素であり、奈良時代には東大寺が、中世には興福寺が荘園開発を行う基盤となった。しかし、古代に成立した荘園は、10世紀頃に衰退することが知られており、当遺跡においても溝は埋設している。

中世段階では、確認した遺構は井戸のみである。出土した土師皿から、大きく2時期に分けることができる。SE04から出土した土師皿は、口縁が小さく立ち上がり、総じて器高が低く、13世紀後半のものである。SE03から出土した土師皿は、底面から丸みを帯びて立ち上がり、全体に均一な厚さだが口縁端部はやや先細り、15世紀後半と考えられる。覆土の様相から、SE01・02も15世紀後半に属すると考える。また、SE04からは土師皿の他に、漆器の小皿、箸状木製品、櫛、砥石の他、遊戯具である碁石が出土しているが、これら日常生活を窺えるような遺物からは、西方に広がる集落域の存在を想定できる。用水としての溝は他所に移されたと考えられ、平成22年度の上蔵垣内遺跡の調査では、現在の上蔵垣内集落が展開する近辺において、溝や井戸を中心とする中近世の遺構・遺物が、古代のものよりも顕著になることも当遺跡の西方に集落域が広がることを示唆する。このころの坂井平野には、奈良の興福寺が経営する荘園が広がり、当地は河口荘閭郷に含まれていたと推察される。近年では、中世の荘園経営に関連する報告も増加しており、県埋文センターが実施した平成10年度の大関西遺跡の調査では、十郷用水から分岐した用水の一つである西江用水に関係づけられる溝を、同20年度の大関東遺跡の調査では、大口館に關係すると考えられる堀を確認している。当地の近辺には、他にも下関館や伝承・文献のみの朝日屋敷の存在が知られるが、これら館の存在から、当地域を穀倉地帯として重要視し、十郷用水の維持管理に関与したであろう勢力を垣間見るのである。

#### 参考文献

- 福井県教育委員会 1987『福井県の中・近世城館跡』  
 福井県 1988『福井県史 資料編 1 古代』  
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2001『大関西遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第53集  
 坂井市 2007『新修坂井町誌 通史編』  
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008『源訪問興行寺遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第20集  
 青木隆佳 2009『大関東遺跡』『第24回福井県発掘調査報告会資料』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター  
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2010『中角遺跡3-Ⅱ-Ⅲ区上層編-』福井県埋蔵文化財調査報告第110集  
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2013『大関東遺跡 上蔵垣内遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第139集



# 写 真 图 版





(1) 遺跡近景 (北西から)



(2) 調査区西側 (南西から)



(1) SE01 (西から)



(4) SE03 検出状況 (南から)



(2) SE02 (南から)



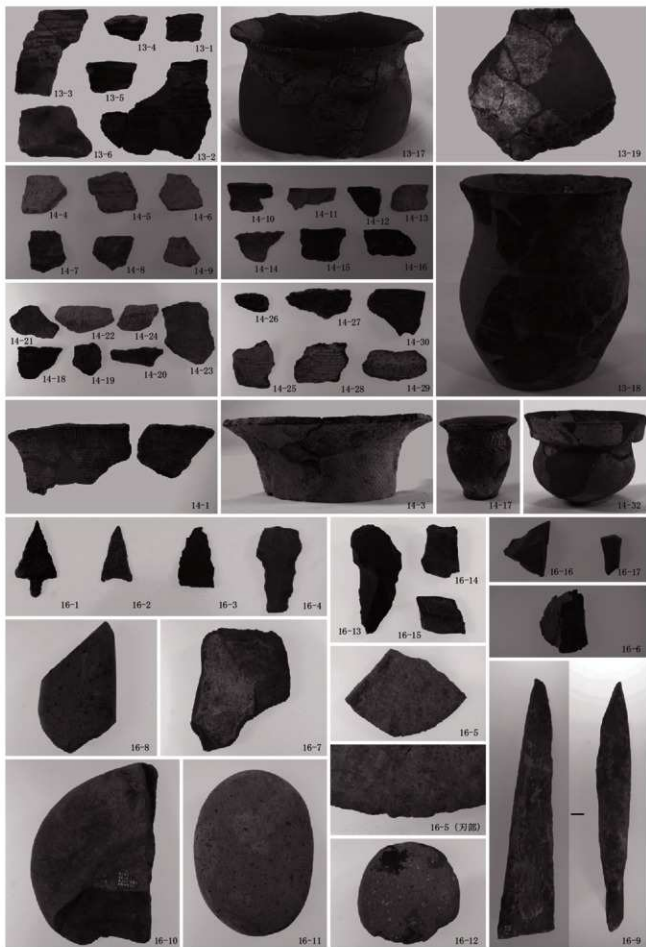
(5) SE04 (南から)

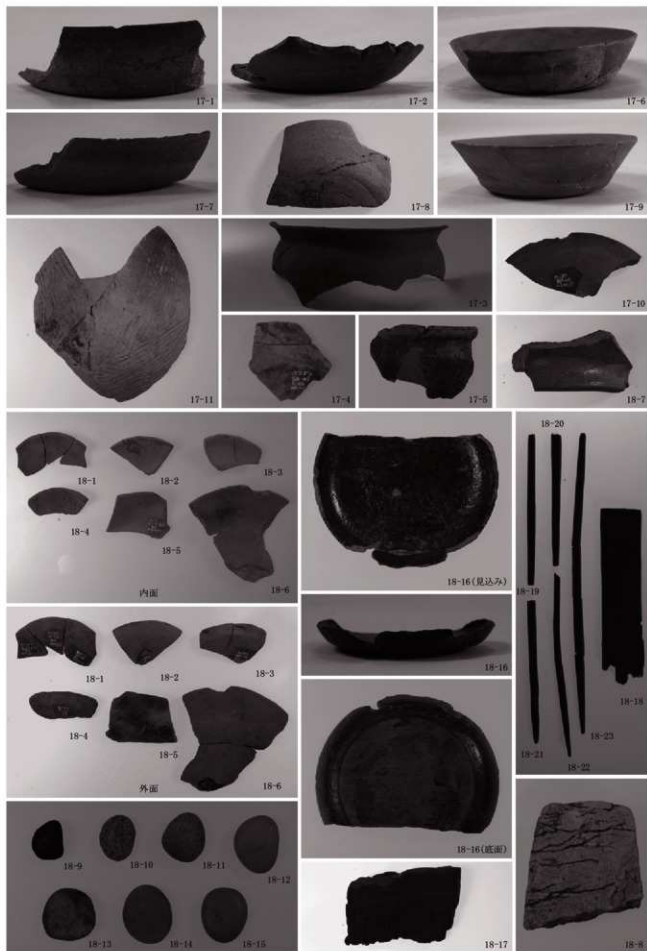


(3) SE03 (南から)



(6) SE04 漆皿出土状況 (南から)





報告書抄録

ふりがな	かみくらがいちいせき							
書名	上蔵垣内遺跡							
副書名	国営九頭竜川下流土地改良事業に伴う調査							
巻次								
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第151集							
編著者名	野路昌嗣 山本孝一							
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL 0776-41-3644							
発行年月日	西暦2014年3月18日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみくらがいちいせき 上蔵垣内遺跡	ふくいけん 福井県 さかいし 坂井市 さかいちょう 坂井町 ごほん 五本	18210	11040	36° 10° 26°	136° 13° 38°	20090408 ～ 20090831	1,200㎡	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
上蔵垣内遺跡	集落	縄文 弥生 古代 中世	溝 溝 井戸	縄文土器 弥生土器・石器 須恵器・土師器 土師皿・石製品・漆器・ 木製品など				
要約	<p>上蔵垣内遺跡で確認した遺構は主に溝である。大きく弥生時代と古代の2時期に分けることが出来るが、どの時期においても水路としての機能が考えられる溝が多い。</p> <p>古代から現在まで坂井平野に展開する十郷用水は、当地のやや南から放射状に伸びているが、今回の調査で確認した溝は十郷用水に関係すると思われる。</p>							





---

福井県埋蔵文化財調査報告 第151集

## 上 蔵 垣 内 遺 跡

— 国営九頭竜川下流土地改良事業に伴う調査 —

平成26年3月7日 印刷

平成26年3月18日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒910-2152 福井市安波賀町4-10

印刷 白崎印刷株式会社

〒910-0843 福井市西間発3-715

---

